

## 「レオンのこと」 澤 功（澤の屋旅館主人）

※この記事は日観連機関誌の2009年6・7月号に掲載されました。

オカメインコの「レオン」が亡くなりました。平均寿命は25年と言われて33年、家族と共に生き、天寿を全うしてくれました。

私が昼寝から目覚めると、目の前をレオンが左足をひきずるようにして、ぴよこたんと片足歩きをしています。

「レオン、どうした」と言って抱き上げて、左足を見ても何も異常がありません。また歩かせると片足歩きです。「レオンの足がおかしい」と家内に話して、鳥の病院に連れて行くことにしました。息子がインターネットで池袋の小鳥の病院を見つけて早速出掛けました。

息子が運転し私が後部座席でレオンを胸に抱くと、少しも暴れず、おとなしくしています。

小鳥の病院で先生に「33歳です。」と話す診察をして「長生きですね、でも心臓は丈夫ですよ」と言われました。「足のレントゲンを撮りたいので川口の病院に連れて行きますので、3～4日預かることとなりますが、よろしいですか」と言われレオンを置いて帰って来ました。

次の日、レオンを励まそうと、家内と息子それに孫2人で川口の病院に車で見舞いに行きました。「レオンは元気だったよ」と孫が嬉しそうに話してくれました。

レオンが退院出来るという4日目の朝、私は渋川で外客受入接遇研修会の講師に呼ばれていました。お客さまの朝食の手伝いを切り上げて、出掛けようとすると電話が鳴り「小鳥の病院ですが」と言われて何か不吉な予感がして、側にいた息子に、とっさに受話器を渡しました。

電話の受け答えをしていた息子の声が高くなって「レオンが死んだ」と言いながら、色々な事を質問しています。

それを聞いていた嫁さんが、フロントの後ろの管理入室でしゃくりあげながら泣き出しました。

私は電車の時間がせまっていたので、家を飛び出し、渋川ではあまりレオンの事を考えないようにして講演を終わり帰って来ました。

家では、家内が「レオンのお通夜のためにお寿司を頼んだわよ」と言って家族全員が食卓に座っていました。レオンは息子が病院から引き取ってきて、仏壇の中の澤家の霊簿に「澤 レオン、命日平成21年3月13日、33歳」と書き込みました。子供の頃、旅館が忙しいので、かまってもらえず「レオンがいなかったらぐれたかも」と言っていた次男は、背広に黒ネクタイを締めて、いつまでも酒を飲み続けていました。

「明日、庭の桜の木の下に、レオンを埋めてあげよう」と私が言うと、嫁さんが「レオンを剥製にしても

う1度命を吹き込んで上げましょうよ」と言い出しました。翌日、嫁さんのお父さんが懇意にしている本郷の剥製のお店にレオンを連れて行くと、約2ヶ月かかって費用は5万円程度と言われ、お願いしました。

レオンには、家族全員がそれぞれ違う関わり合いを持っていました。私の役目は、玄関の横に置いた鳥籠から朝8時に起こし、夜10時に寝させることですが、他の者が籠に手を入れても出て来ません。そして、私の肩の上に乗って、チェックインするお客様を毎日、お出迎えます。

家内は、レオンが病気になると必死で看病しますが、また元気になると、大きな声で、そこを嘯まないで！そこに入らないで！と1日中、追いかけてまわし、そして“ふん”の後始末です。

長男がインターネットをやっていると手のひらの中で寝ています。

夕食は家族全員でとりますが、いつも勤めから帰ってきた次男の席で、食事をとります。

大人には、果敢に、向かって行くのに2人の孫には赤ちゃんの時から1度も嘯みついたことはなく、ただ遊ぶだけでした。

孫が親戚に行って「次の鳥は、何を飼うの」と聞かれて、「レオンが亡くなって家族みんなが悲しんでいるから、次の鳥は飼わない」と答えたそうです。レオンの死の悲しみが家族にとって思い出になるには、まだ時間が掛かるようです。

チェックインした外国のお得意さんに「レオンは元気」と問われて、「亡くなりました」と言うと皆さん、一様に肩をすぼめて「オーオー」と悲しそうな表情をしてレオンの死を悼んでくれます。